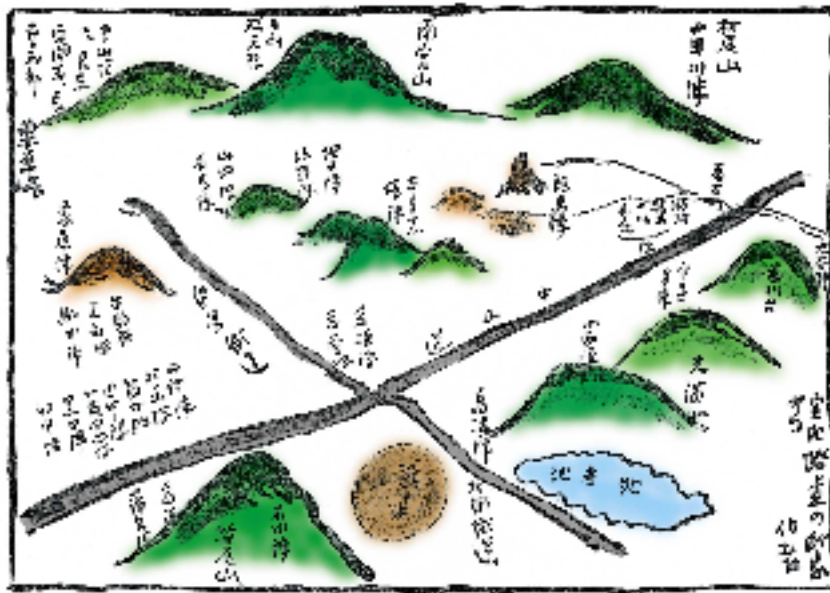


「関ヶ原と士郎さんの 好きな武将」特集

平成19年5月29日～平成19年10月28日



関ヶ原合戦陣形図 尾崎士郎 画

尾崎士郎記念館

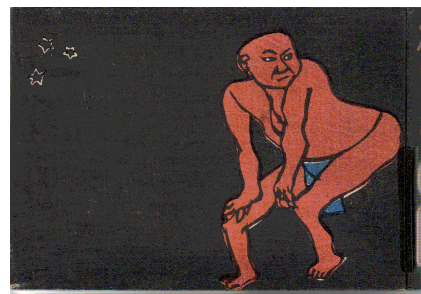
「関ヶ原と士郎さんの好きな武将」特集

士郎さんといえば長編小説『人生劇場』が有名ですが、『石田三成』『篝火^{かがりび}』『雲悠々^{くもゆうゆう}』の3作に代表される関ヶ原合戦記など、歴史小説も高く評価されています。

今回の特集は、士郎さんが関ヶ原を中心とする戦国動乱の時代を背景にして描きだした、士郎さんの好きな武将を紹介します。

○士郎さんと関ヶ原

『石田三成』 士郎さんが著した最初の歴史小説が、昭和13年（1938）12月に刊行した『石田三成』である。この作品は、徳川家康の東軍と関ヶ原で戦って破れた石田三成の生涯を描いた作品ではなく、豊臣秀吉の病床期とその死後から合戦勃発前までの状況を描出している。前半の主人公は三成というよりも前田慶次郎だ。当初は士郎さんも一大合戦記を予想していたはずであるが、「ペン部隊」として従軍するため中断された。

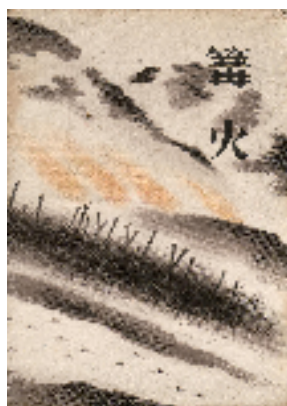


『石田三成』初版本表紙

『篝火』 昭和16年（1941）5月に刊行された『篝火』は慶長5年（1600）9月15日の「関ヶ原合戦」に焦点をしばっている。2編に分かれており、第1編は決戦を前にして、8月23日あたりから集結した両軍の動静を、こと細かに描出し決戦前日で終わっている。第2編は9月15日の決戦当日一日だけの叙述であるが、その迫力には圧倒される。

『雲悠々』 発表当初は「篝火続編」という題名をもちいられたが、昭和20年（1945）11月に刊行されるにあたって『雲悠々』と改題された。この作品は「関ヶ原合戦」の終末から筆を起し、石田三成を中心とする敗戦後の西軍諸将たちの顛末や立花宗茂、真田幸村など生き残った敗軍の将についての生きざまに触れている。登場する人物は「其末路の悲惨」なるものばかりである。

士郎さんの西軍が負けた要因の考察 士郎さんは『雲悠々』のなかで「松尾山に形勢を観望する小早川勢の裏切ることは既定の事実である。大谷吉継^{ほうすん}の方寸の中には金吾中納言の逆襲なぞは物の数にも入っていなかった。（…中略…）盲目の名将大谷の心眼にも、腹心^{たの}と恃む脇坂安治が敵に内応することだけは、かすかな翳^{かげ}さえも映していな



『篝火』初版本函

かったのである。」と述べ、同様の記述が『篝火』『春雁』等にもみえ、西軍を敗北にみちびいたのは、小早川勢のために配置した脇坂、朽木、小川、赤座らの裏切りであると考えている。

『石田三成』『篝火』『雲悠々』の3部作が士郎さんの代表する関ヶ原合戦記であるが、この遺産を継承するかたちで他にも多くの関ヶ原を背景とした『春雁』『真田幸村』『山河歲月』などの歴史小説を著しており、幾度となく関ヶ原にもおもむいている。

元代議士石田博英氏は『飄々録』に“われ「関ヶ原」を愛す”と題し、その中で「(関ヶ原は)尾崎さんを偲ぶには一番良い場所にちがいない。」と記し、士郎さん自身も『小説四十六年』で「小説のおもしろさにおいても、『篝火』は私の全作を通じて、第一位に推されるべきものだろう。」と述べている。

士郎さんにとって関ヶ原という大きな歴史の運命劇は、親愛感の最も深いものであったにちがいない。

○士郎さんの好きな武将

「**石田三成**」 近江佐和山19万4千石の一大名にすぎないが、士郎さんの『石田三成』『篝火』『雲悠々』を読めば、西軍の総大将は中国領120万5千石の大老毛利輝元でもなければ、備前岡山57万4千石秀吉の養子だった宇喜田秀家でもない、石田三成であることがよくわかる。敗戦後京六条河原で斬首、享年41歳。徳川家康に敵対した三成人物像はかなりゆがんだかたちで、今日に引きつがれている。士郎さんはそれを修正したく、『石田三成』に筆を染めたのであろう。しかし、士郎さんが「石田三成」を描いた理由は、石田三成が好きだったのではなく、「徳川家康」が嫌いだったからかもしれない。

・登場する主な作品：『石田三成』『篝火』『雲悠々』

「**前田慶次郎**」 前田利家の義理の甥であるが、奇矯な振る舞いを好む傾奇者として知られた。前田家を出奔するとき、利家をだまして水風呂に入れ、駿馬松風を奪ったという逸話がある。最後は米沢藩に仕え、隠棲したという。士郎さんの愛情措く能はざる人物だ。

・登場する主な作品：『石田三成』『雲悠々』

「**真田幸村**」 徳川家康を追いつめた名将。関ヶ原合戦では徳川秀忠の大軍を信州上田城にて打ち破ったが、西軍本体が敗退したため、改易にて紀伊国九度山幽閉となったが、大坂の陣に復帰する。幸村の戦略どおりに戦っていれば、大坂の陣は家康に勝ったかもしれないといわれる。大坂夏の陣で討死、享年49歳。しかし、士郎さんが本当に好きだったのは、豊臣秀吉をして「天下を窺うやつは、黒田官兵衛と真田安房守だ。」(『雲悠々』より)といわしめた幸村の父、真田昌幸と思われる。

・登場する主な作品：『雲悠々』『春や昔大阪城』『真田幸村』

「**立花宗茂**」 筑後柳川13万2千石の領主。朝鮮の役で活躍し、秀吉をして「その忠義、鎮西一。その剛勇、また鎮西一。」といわしめた男。関ヶ原合戦では西軍の主力として東軍の京極高次が護る大津城を攻めて開城させた。しかし、主要街道を東軍に押さえられ、西軍本体との連絡が取れず本戦には参加できなかった。関ヶ原で西軍が壊滅したことを知ると逸早く大坂城へ退き、総大将毛利輝元に籠城徹底抗戦を主張したが、輝元にすでに戦意はなく、やむなく柳川へ引き上げた。しかし、大軍を擁する東軍に攻められ降伏・開城となる。改易となった宗茂は「乾坤一布衣の素浪人」となって諸国を漫遊するが、郷国柳川のことを忘れたことはなかった。「せめてひと眼、柳川



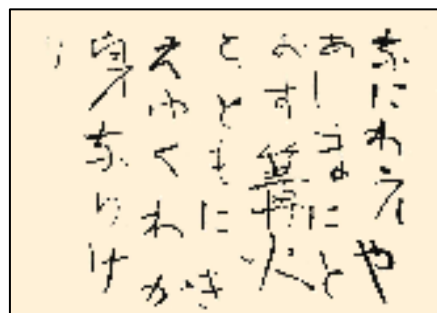
『雲悠々』初版本表紙

の土を踏んで、切腹するもよし、打首になるもよし、いや、よしんば途中で捕らえられたところで、宗茂の心は柳川にある、ああ、帰りたい、宗茂を育ててくれたあの土地をどうして忘れることが出来ようか。」

（『春雁』より）

やがて、宗茂は幕府の御書院番頭に召しだされ、徳川秀忠に気に入られる。月日は流れ元和6年（1620）夢にまで見た旧領の筑後柳川を与えられ、大名として完全に復活を果たしたのである。士郎さんの最も好きな武将はこの立花宗茂である。

・登場する主な作品：『立花宗茂』『雲悠々』『春雁』『山河歲月』『雲と残月』



士郎さん自筆の句

その他にも関ヶ原の戦いで活躍後、浪人となり大坂の陣で壮絶な死を遂げた後藤又兵衛、塙団右衛門、上杉の智将直江兼次などが士郎さんの好きな武将である。

士郎さんは、敗れたものの側から人物や事件をとらえる作家であった。歴史小説では青成瓢吉を士郎さんの好きな武将に置き換え、描出したのかもしれない。そして、士郎さんの歴史小説の手法は現代に多くの影響を与えている。今回の特集をとおり、ぜひ士郎さんの歴史小説に触れていただきたい。

「関ヶ原と士郎さんの好きな武将」特集の展示品目録

①書 籍	（『石田三成』『篝火』『雲悠々』初版本）	各1点
②同 上	（『春や昔大阪城』『真田幸村』初版本）	各1点
③同 上	（『春雁』『雲と残月』初版本）	各1点
④講演メモ	（士郎さん直筆メモ 関ヶ原350年祭にて講演）	1点
⑤書籍原稿	（高橋義孝氏直筆原稿 『篝火』『雲悠々』批評）	1点
⑥同 上	（石田博英氏直筆原稿 『瓢々録』掲載）	1点
⑦陣形図	（「関ヶ原合戦」陣形図 尾崎士郎画）	1点
⑧写 真	（「関ヶ原」関係写真）	2点
⑨同 上	（「柳川」関係写真）	2点
⑩版彩画	（「石田三成」「前田慶次郎」 中川一政画）	各1点
⑪書籍チラシ	（『石田三成』）	1点
⑫新聞記事	（『石田三成』〈昭和13年〉 尾崎士郎収集）	1点
⑬同 上	（『山河歲月』）	1点
⑭時世句	（士郎さん自筆の句 「なにわえや・・・」）	1点
⑮新聞掲載小説	（『真田幸村』）	1点
⑯色 紙	（「自ら遁れて・・・」 尾崎士郎書）	1点
⑰同 上	（「故山白雲無尽時」 尾崎士郎書）	1点
⑱雑 誌	（「篝火」）	3点
⑲同 上	（『春雁』『雲と残月』掲載雑誌）	各1点